

「伝えること」は誰かを傷つけるのか

沖縄県立那覇国際高等学校三年 高良 きあら

戦争について伝えることは、誰かを傷つけてしまうのだろうか。

一人の女の子を泣かせてしまったことがある。幼稚園生くらいで感受性豊かだったその子は私が行った沖縄戦についての紙芝居で傷ついてしまったのかもしれない。子ども向けに表現を工夫したつもりだったが、暗い洞窟、煙に包まれた空、大切な人と離れ離れになるといった暗い描写に恐怖を感じたのだろう。

ひどいことをしてしまったと感じるとともに、その子の涙は私の問いとなった。

「伝えるべきではなかったのか。それとも必要だったのか。」と。

戦争の記憶は現在を生きる私たちにとってとても重い。学校で行われる平和学習は、時に生徒の精神的負担となり苦しめてしまうし、そのことは現在、多くの大人が問題視している。

それでもなぜ私たちは戦争の悲惨さや平和について伝え続けるのか。

文部科学省は、教育の目的を「平和で民主的な社会の形成者を育てること」としている。それは、悲惨な戦争から平和の大変さを身をもって体感した日本にとって「平和」という理念を達成するために必要となる項目である平和教育とも結びつくだろう。平和は、人と人とのつながりによって保たれているものであり、それを維持するため、戦争を遠い話にしないために次世代の子どもたちにも伝え続けなければいけない。それが平和教育の意義となる。

しかし、伝え方を間違ってしまったならば、そのとき子どもたちに残るのはトラウマや拒否感、そして、「どうでもいいや。」という現実から目を背けて自分には関係ないものと捉えてしまうことによる無関心につながるかもしれない。とはいえ、何も知らないまま大人になっていくのも危いのではないか。

戦争について語ることには大きな責任が伴う。だからこそ伝え方やタイミングを考えなければならない。私が見たあの涙はただただ恐怖からくる「傷」ではなく、「気づき」だったのかもしれない。歴史を伝えることは時に人の心を揺らし、その揺れこそが平和を守る第一歩になりうる。けれど、あの時女の子がどういう気持ち、考えをもっていたか確かめることはできなかった。だから、これから活動が続けていく上でただ恐怖を与えるのではなく、年齢に応じた表現で、聞き手の気持ちに耳を傾けながら、戦争の現実とともに平和の大切さやその先にある私たちにできることを考えさせるような伝え方をしていきたい。

「当然のことだ。」と思われるかもしれないけれど、平和教育に携わる人々、平和を伝える義務のある大人たちにもその意識を忘れてほしくない。

先程タイミングが大切だと述べたが、小中学生の時が特に平和教育を受けることが多い時期だと思う。授業で「火垂るの墓」という映画をみたり、平和祈念公園やヌヌマチガマに訪れたことがある。当事者の生々しい体験談を聞くこともあった。当時は暗くて気が滅入る苦手な時間だったけれど、今はそういう機会が設けられるのは平和を学ぶ上で素晴らしいことだったと思う。それと同時に、先生たちはその後の生徒のアフターケアについて考えてみてもいいかもしれないなとも思う。大抵は最後に振り返りを書いて終わる授業ばかりだから心を癒す時間がもっとたくさんあれば、生徒たちが拒否感を覚えることを避けつつ、よりいっそう今の生命に感謝したり平和と向き合う時間ができるのではないかと私は捉えている。

将来、自分の子どもに戦争のお話をしなければならぬときが来る。年齢に合わせて方法は様々で、絵本を読んだり、一緒に映画を見たり、平和祈念公園にも訪れるだろう。そのときは戦争を学ぶ体験そのものだけではなく、海を眺めたり、真っ白な砂浜に寝転んで青空を眺めたりして一緒に困難を乗り越えてきた沖縄の自然を感じたい。そうした穏やかな時間の中でこそ、平和のありがたさを実感できると思うから。

子どもたちと今ある幸せと平和に感謝すること。それもまた、平和教育の一環ではないだろうか。